

女子大生の化粧行動と意識の関連性について

天 野 怜 美^{*1}・齊 藤 勇^{*2}

Relationship between self-consciousness / other-consciousness and makeup of female students

AMANO Satomi and SAITO Isamu

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between self-consciousness/other-consciousness of today's female students and their face makeup. Questionnaires were used to survey self-consciousness/other-consciousness of female students and the specific frequency of their use of makeup in daily life. As a result, it was shown that the overall frequency of makeup of students with high public self-consciousness was higher than that of students with low public self-consciousness.

[Keywords] self-consciousness, public-consciousness, other-consciousness, makeup

問 題

化粧をすることには対人的な魅力づくりの意図がある。松井・山本・岩男（1983）の研究によると、化粧をすること自体に満足を感じる女性、化粧をすることで他者に適切なイメージを与えようと思う女性、化粧をすることでまた社会適応やこころの健康が得られると感じる女性ほど化粧度は高いと示されている。化粧行動には2つの効果を挙げることができる（岩男・松井1984）。まず1つめは、対人的効果である。例えば、化粧することによって他者から良い評価を受けることで満足する、あるいは内向的な人が化粧することによって積極性が高まったりするなどである。女性は、自己呈示（self-presentation）の道具として化粧することにより、自分のイメージを作り出している。それは他者からの評価を期待したものであり、人に見せるための化粧であると言える。

化粧を施す前と施した後のパーソナルスペースの大きさを調べたところ、内向的な人は、化粧を施す前から施した後にかけてパーソナルスペースの距離を短くしていたことが岩男・松井（1984）によって分かった。これによって、内向的な人は化粧行動によって、対人的積極性が強くなるということが示唆されたと言える。1つめの対人的効果は、余語・原・松永（2000）によって、化粧行動をすることによって生じる感情に対する自己評価の影響と他者評価の影響が調べられた。参加者は、自分にとって望ましい化粧を施す群と自分にとって望ましくない化粧を施す群とに分けられ、それぞれポジティブとネガティブな他者評価が与えられた。このことより、女性は、他者からの評価を期待した化粧行動をおこない、他者からの注目や言語的なフィードバックを求めていることが示唆される。また、他者評価によって、化粧した自分自身に対する自信が生まれ、対人的な積極性を促進する自己呈示機能が働くのである。

2つめは、化粧することでリラックスする、気分が高揚する、安心するといった対自的効果で化粧による自己満足機能である。女性は化粧することで、自分自身の内面に化粧によって綺麗になったという満足感が生まれるのである。宇山・鈴木・互（1990）は、化粧行動をするとどのような気分を感じるのか、それらの感じ方には年齢による違いがあるのかどうかを調べている。結果の分析から、「①積極性の上昇」「②リラクゼーション」「③気分の高揚（対他的）」「④気

* 1 立正大学大学院心理学研究科対人・社会心理学専攻修士課程

* 2 立正大学名誉教授

分の高揚（対自的）」「⑤安心」という5つの気分因子を抽出した。以上の因子のうち、①・③は対人的効果、②・④・⑤は対自的効果とみることができる。つまり、化粧行動は外見的变化をもたらすだけでなく、化粧を施す者の感情状態も変化させるのである。また、余語・浜・津田・鈴木・互（1990）は、主観的感情状態、とくに不安と覚醒の変化を調べている。この実験では、素颜・自己化粧・技術者化粧の条件下で感情状態の測定がおこなわれた。その結果、自己化粧・技術者化粧に関わらず、化粧行動そのものが自信や満足感などのポジティブな心理的效果をもつことが見いだされた。これは、対人行動や自己呈示に関わらず、化粧をすることによって生まれる感情を明らかにしたものである。これらの研究によって、化粧行動には対自的な側面で自己満足の機能があるということが示唆される。

Fenigstein, Scheier & Buss (1975) は、自分自身に注意を向けやすく自己を意識しやすい性格特性を自己意識特性とし、これまでの研究から、公的自己意識・私的自己意識の高い人は、それぞれ特徴的な行動様式をもつことを明らかにしている。例えば、公的自己意識の高い人は、他者からの評価的態度に敏感であり（Fenigstein, 1979）、他者の目を意識して自己表出の仕方をコントロールする傾向が強いことが明らかにされている（Scheier, 1980; Carver & Humphries, 1981）。また私的自己意識の高い人は、その時々での自分の意見・態度を自覚しているため、態度と行動の一貫性が高いことが見出されている（Scheier, 1980）。このように自己意識の強さはさまざまな対人行動に影響を与えることが示唆されている。

化粧行動と自己意識の関係については以下のような研究がある。Cash & Cash (1982) の実験では、公的自己意識の高い女性ほど化粧を施してから出かける場面が多く、状況に関わらず化粧行動すると報告されている。また、Miller & Cox (1982) の実験によっても、公的自己意識の高い女性ほど化粧の施し方の程度や化粧の利用度が高いことが示されている。これらの研究は、多くの女性が社会的な自己呈示や自己像の管理のための道具として化粧行動するという側面を明らかにしている。

自己意識と化粧行動の関連についての研究は少ない。化粧行動は着飾るという点で被服行動と類似している。被服行動と自己意識の関連については以下のような研究がある。被服行動に対する態度や被服選択時に被服の流行性、魅力を重視する度合いが公的自己意識と関係している（Kwon, 1992; Lee & Burns, 1993）。それに対して、被服選択時に起伏する快—不快・熱狂—憂鬱・自信—不安などの気分は、私的自己意識と関係しているとされている（Kwon, 1992）。化粧行動の対人的効果も公的自己意識や私的自己意識と関連するのではないかと考えられる。日比野・神谷・岡・玉置・余語（1999）によって、公的自己意識と化粧の関係性が確認されているが、私的自己意識との関係性は示されていない。彼らは、公的自己意識の高い女性ほど、目元に対する化粧の施す程度が強く、社会的状況の種類に関わらず化粧行動を入念にする傾向があると報告している。

本研究では、公的自己意識と私的自己意識の両側面から化粧行動の対人的効果と対自的効果を明らかにすることを目的として実証的研究を行った。

他者意識とは他者に注意や関心、意識が向けられた状態をいい、注意の向けやすさに関する性格特性を他者意識特性という。辻（1993）は、他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定するための尺度を開発した。他者意識について辻（1993）によると、他者意識は意識が現前の他者に直接的に向けられているか、それとも他者の空想的イメージに向けられているかによって大別される。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識や関心を「内的他者意識」といい、他者の化粧や服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心を「外的他者意識」とした。また、他者について考えたり、空想をめぐらせたりしながら、その空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向を「空想的他者意識」とした。化粧と他者意識との関連について、平松・牛田（2004）が化粧にどのような意識を若者がもっているのか検討を行ったところ、「魅力的向上・気分高揚」「必需品・身だしなみ」「効果不安」の3つの化粧意識が明らかとなった。この結果は、若者が他者との関係に向けた対他的な意識により化粧を行っていることを意味している。

本研究は、自己意識の側面に加え他者意識の側面からも化粧行動の効果を調べることを目的とし、化粧行動の質問方法を工夫した。従来の研究（Miller & Cox, 1982; 日比野ら, 1999）では、どの程度化粧をしているかという質問を用いている。ただし、具体的な化粧の種類については研究されていない。しかし実際の化粧行動を研究するためには、具体的な化粧品などを調査する必要があると考えられ、本研究では独自の質問紙を作成することとした。また化粧行動と自己意識との関係性を調べることも目的とした。以上のことから次のような仮説を立てた。

- 仮説 1. 公的自己意識の高い人は公的自己意識の低いよりも全体的に化粧度が高くなる。
仮説 2. 公的自己意識の高い人は低い人に比べて特に目元においての化粧度が高くなる。
仮説 3. 他者の外見意識が高い人は低い人よりも化粧度が高くなる。

方 法

大学生を対象として、質問紙調査を実施した。以下に調査対象者と調査の実施方法、質問紙の構成を説明する。

調査対象者：都内私立大学、心理学部の1年生～4年生の学生を対象に、女性111名であった。

調査日時：2013年7月10日にて、授業中に質問紙を配布し、調査を行い時間内に回収した。

質問項目

- (1) 自己意識尺度：菅原（1984）の自己意識尺度を使用した。
- (2) 他者意識尺度：辻（1993）の他者意識尺度を使用した。他者意識の対象を同性・異性の2対象について回答を求めた。
- (3) 化粧行動および使用化粧品表：生活場面における化粧頻度を調べる項目を独自に作成した。社会的場面として次の8場面を想定した。①好きな人とデート②飲み会（異性を含む）③女子会（同性のみ）④同性の友人と遊ぶ時⑤異性の友人と遊ぶ時⑥一人で家にいる時⑦学校へ行く時⑧バイトへ行く時といった8つの場面である。化粧品目は次の8種類である。①ファンデーション②アイブ로우③アイライン④アイシャドウ⑤マスカラ⑥つけまつげ⑦チーク⑧口紅またはリップである。
- (4) 測定尺度5件法：本調査では、上記を記載した質問紙を配布し、回答を求めた。自己意識を測定する項目と各生活場面における化粧度を測定する項目は、それぞれ1から5までの5件法を用いた。また自己意識を測定する項目では、1「全く当てはまらない」、2「当てはまらない」、3「どちらでもない」、4「当てはまる」、5「非常に当てはまる」で示し、各生活場面における化粧頻度を測定する項目では、1「全くしない」、2「あまりしない」、3「たまにする」、4「よくする」、5「必ずする」と示した。

結 果

1. 自己意識

1. 自己意識における因子構造と信頼性

自己意識に関する21項目に対して、主因子法・プロマックス回転をおこなった。その結果、2回の因子分析により2因子とした。因子パターンと因子間相関と信頼性を表1に示す。

第1因子は11項目で構成されており、そこで他者からの評価を気にする項目が多かったことから公的自己意識因子と名付けた。また第2因子は10項目で構成されており、そこで自己の内面を意識する項目が多いことから、私的自己意識因子と名付けた。因子分析によって抽出された2つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「公的自己意識」の下位尺度得点は（ $M: 3.79, SD: .61$ ）となった。「私的自己意識」の下位尺度得点は（ $M: 3.70, SD: .61$ ）であった。下位尺度の内的整合性を検討するために各下位尺度の得点のCronbachの α 係数を算出し、確認をおこなったところ「公的自己意識」で $\alpha=.88$ 、「私的自己意識」で $\alpha=.85$ であった。

2. 自己意識尺度の高群・低群の群分け

自己意識から抽出された公的自己意識、私的自己意識の2つの下位尺度毎の平均値をもとにし、“ $M \pm 0.5 \times SD$ ”で高群と低群に群分けを行った。

3. 公的自己意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差の検討

公的自己意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差を検討するために t 検定をおこなった。

1) ファンデーション

表2は、各場面のファンデーションの頻度の平均値と標準偏差を比較し示したものである。

公的自己意識の低い人より高い人のほうが、好きな人とデートする時（ $t(72.34) = 2.45, p < .05$ ）、また異性を含めた飲

表1. 自己意識尺度における因子分析結果と因子間相関、信頼性

	因子名		<i>M</i>	<i>SD</i>	α
	公的自己意識	私的自己意識			
01_自分が他人にどう思われているのか気になる	.90	-.20			
09_他人の評価を考えながら行動する	.76	-.06			
08_人前で何かをする時、自分の仕草や姿が気になる	.73	.13			
04_自分の発言をどう他人が受け取ったか気になる	.66	.05			
07_自分についての噂に関心がある	.60	-.07			
03_人に会う時、どんな風に振る舞えば良いのか気になる	.60	-.04	3.79	.61	.88
06_自分の容姿を気にするほうだ	.57	.04			
02_世間体などきにならない	.56	-.18			
10_初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気をつける	.55	.08			
11_人の目に映る自分の姿に心を配る	.53	.37			
05_人に見られていると、ついかっこうをつけてしまう	.51	.00			
19_しばしば、自分の心を理解しようとする	-.05	.74			
12_自分がどんな人間か自覚しようと努めている	.02	.71			
18_他人を見るように自分を眺めてみることもある	-.10	.69			
15_自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する	-.16	.68			
13_その時々、の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい	.04	.66			
21_気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じるほうだ	.09	.65	3.70	.61	.85
16_ふと、一歩離れたところから自分を眺めてみることもある	.03	.64			
20_常に、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	.05	.57			
17_自分を反省してることが多い	.26	.39			
14_自分自身の内面のことはあまり関心がない	-.20	.35			
因子間相関					
	公的自己意識	私的自己意識			
	公的自己意識	—			.30
	私的自己意識	—			—

表2. 公的自己意識の高低によるファンデーションの平均値、標準偏差および *t* 値

女性	低群		高群		<i>t</i> 値
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
1.好きな人とデート	3.53	1.65	4.26	1.21	2.45 *
2.異性を含めた飲み会	3.40	1.62	4.24	1.20	2.92 **
3.同性のみの飲み会	3.44	1.61	4.18	1.26	2.51 *
4.同性の友人と遊ぶ時	3.44	1.61	4.10	1.29	2.22 *
5.異性の友人と遊ぶ時	3.47	1.65	4.11	1.31	2.15 *
6.一人で家にいる時	1.23	.57	1.19	.74	.29
7.学校へ行く時	3.05	1.60	3.74	1.41	2.35 *
8.バイトへ行く時	3.16	1.57	3.77	1.45	2.05 *

** $p < .01$ * $p < .05$

み会に行く時 ($t(72.63) = 2.92, p < .01$)、同性のみの飲み会に行く時 ($t(75.97) = 2.51, p < .05$)、同性の友人と遊ぶ時 ($t(77.24) = 2.22, p < .05$)、異性の友人と遊ぶ時 ($t(76.44) = 2.15, p < .05$)、学校へ行く時 ($t(103) = 2.35, p < .05$)、バイトへ行く時 ($t(103) = 2.05, p < .05$) の7場面においてファンデーションを塗っていた。

2) アイブ로우

アイブ로우の頻度では各場面において有意な差が見られなかった。

3) アイライン

表3は、各場面のアイラインの頻度の平均値と標準偏差を比較し示したものである。

公的自己意識の低い人より高い人の方が、好きな人とデートする時 ($t(103) = 2.62, p < .05$)、異性を含めた飲み会に行く時 ($t(103) = 2.59, p < .05$) 同性のみの飲み会に行く時 ($t(103) = 2.41, p < .05$)、同性の友人と遊ぶ時 ($t(103) = 2.18, p < .05$)、異性の友人と遊ぶ時 ($t(103) = 2.72, p < .01$) の5場面においてアイラインを引いていた。

4) アイシャドウ

公的自己意識の低い人より高い人の方が、バイトへ行く時 ($t(103) = 2.70, p < .01$) の場面においてアイシャドウを塗っていた。

表3. 公的自己意識の高低によるアイラインの平均値、標準偏差および t 値

女性	低群		高群		t 値
	M	SD	M	SD	
1. 好きな人とデート	2.77	1.74	3.63	1.59	2.62 *
2. 異性を含めた飲み会	2.72	1.71	3.55	1.54	2.58 *
3. 同性のみの飲み会	2.70	1.66	3.47	1.58	2.41 *
4. 同性の友人と遊ぶ時	2.70	1.64	3.39	1.56	2.18 *
5. 異性の友人と遊ぶ時	2.58	1.61	3.45	1.62	2.72 **
6. 一人で家にいる時	1.19	.59	1.21	.81	.16
7. 学校へ行く時	2.42	1.62	3.05	1.60	1.97
8. バイトへ行く時	2.53	1.67	3.03	1.56	1.56

** $p < .01$ * $p < .05$ 表4. 公的自己意識の高低によるチークの平均値、標準偏差および t 値

女性	低群		高群		t 値
	M	SD	M	SD	
1. 好きな人とデート	3.37	1.70	4.19	1.38	2.62 *
2. 異性を含めた飲み会	3.23	1.72	4.08	1.44	2.66 *
3. 同性のみの飲み会	3.23	1.70	4.02	1.45	2.46 *
4. 同性の友人と遊ぶ時	3.21	1.70	4.00	1.44	2.50 *
5. 異性の友人と遊ぶ時	3.23	1.74	4.03	1.46	2.47 *
6. 一人で家にいる時	1.05	.21	1.24	.88	1.68
7. 学校へ行く時	2.91	1.77	3.71	1.49	2.44 *
8. バイトへ行く時	2.67	1.66	3.48	1.63	2.49 *

* $p < .05$

5) つけまつげ

つけまつげの頻度では各場面において有意な差が見られなかった。

6) マスカラ

公的自己意識の低い人より高い人の方が、バイトへ行く時 ($t(103) = 2.20, p < .05$) の場面においてマスカラを塗っていた。

7) チーク

表4は、各場面のチークの頻度の平均値と標準偏差を比較し示したものである。

公的自己意識の低い人より高い人の方が、好きな人とデートをする時 ($t(77.67) = 2.62, p < .05$)、異性を含めた飲み会に行く時 ($t(79.94) = 2.66, p < .05$)、同性のみの飲み会に行く時 ($t(80.99) = 2.46, p < .05$)、同性の友人と遊ぶ時 ($t(80.43) = 2.50, p < .05$)、異性の友人と遊ぶ時 ($t(79.77) = 2.47, p < .05$)、学校へ行く時 ($t(79.95) = 2.44, p < .05$)、バイトへ行く時 ($t(103) = 2.49, p < .05$) の7場面においてチークを塗っていた。

8) リップまたは口紅

表5は、各場面のリップまたは口紅の頻度の平均値と標準偏差を比較し示したものである。

公的自己意識の低い人より高い人の方が、好きな人とデートする時 ($t(103) = 2.84, p < .01$)、異性を含めた飲み会に行く時 ($t(103) = 3.19, p < .01$)、同性のみの飲み会に行く時 ($t(103) = 3.22, p < .01$)、同性の友人と遊ぶ時 ($t(103) = 3.01, p < .01$)、異性の友人と遊ぶ時 ($t(103) = 2.96, p < .01$)、学校へ行く時 ($t(103) = 2.28, p < .05$) の5場面においてリップまたは口紅を塗っていた。

公的自己意識の低い人より高い人の方が、ファンデーション、アイライン、アイシャドウ、マスカラ、チーク、リップまたは口紅の5つの化粧行動において化粧頻度が高かった。このことより、仮説1がおおよそ支持されたといえる。さらに、アイライン、アイシャドウ、マスカラの3つの化粧行動において化粧頻度が高かった。そのことにより、仮説2も部分的に支持されたといえる。

表5. 公的自己意識の高低によるリップまたは口紅の平均値、標準偏差および t 値

女性	低群		高群		t 値
	M	SD	M	SD	
1. 好きな人とデート	2.74	1.56	3.61	1.53	2.84 **
2. 異性を含めた飲み会	2.58	1.52	3.55	1.53	3.19 **
3. 同性のみの飲み会	2.56	1.48	3.52	1.51	3.22 **
4. 同性の友人と遊ぶ時	2.60	1.51	3.48	1.45	3.01 **
5. 異性の友人と遊ぶ時	2.51	1.52	3.42	1.56	2.96 **
6. 一人で家にいる時	1.28	.73	1.13	.42	1.21
7. 学校へ行く時	2.35	1.41	3.02	1.52	2.28 *
8. バイトへ行く時	2.23	1.54	2.69	1.54	1.51

** $p < .01$ * $p < .05$

表6. 他者意識（対同性）における因子分析結果と因子間相関、信頼性

	因子名			M	SD	α
	同性内面意識	同性外見意識	同性連想意識			
04_友人の態度や表情を気をつけて見るようにしている	.90	-.13	-.14	3.57	.72	.83
05_友人の考えを絶えず読み取ろうとしている	.84	.06	-.15			
08_友人の言動には絶えず注意を払っている	.68	.12	-.17			
15_友人の心の動きをいつも分析している	.65	.22	-.14			
09_友人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう	.61	-.17	.18			
01_友人のちょっとした表情の変化でも見逃さない	.58	-.33	.21	3.28	.79	.68
12_友人の気持ちを理解するうように常に心がけている	.28	.18	.17			
06_友人の服装や化粧などが気になる	-.06	.79	-.14			
13_友人の体型やスタイルなどに関心がある	-.07	.70	-.11			
10_表面的な友人の印象に心を奪われやすい	-.10	.57	-.10			
14_友人のことをよく空想する	.00	.42	.28	3.46	.82	.73
03_友人のことにしばしば思いをめぐらす	.00	-.01	.81			
07_友人のことがいろいろと心に浮かぶ	.04	.21	.68			
02_友人の外見の変化（髪を切ったなど）に気をとられやすい	-.17	-.22	.52			
11_友人のことをあれこれと考えていることが多い	.22	.36	.40			
	因子間相関	同性内面意識	同性外見意識	同性連想意識		
	同性内面意識	—	.46	.50		
	同性外見意識		—	.62		
	同性空想意識			—		

4. 私的自己意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差の検討

私的自己意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差を検討するために t 検定をおこなった。しかし私的自己意識は、高低群ともにいずれの項目において有意な差が見られなかった。

II. 他者意識

1. 他者意識における因子構造と信頼性

他者意識の同性に関する15項目に対して、主因子法・プロマックス回転をおこなった。その結果、2回目の因子分析により3因子を抽出した。因子パターンと因子間相関と信頼性を表6に示す。

第1因子は7項目で構成されており、そこで同性の友人の内面を意識している項目が多かったことから同性内面意識因子と名付けた。次に第2因子は4項目で構成されており、同性の友人の外見を意識しているような内容の項目が多かったことから同性外見意識因子と名付けた。最後に第3因子は4項目で構成されており、意識している同性の友人はその場にはいないが自分の頭の中で友人に対して意識しているような内容の項目が多かったことから同性連想意識因子と名付けた。因子分析によって抽出された3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「同性内面意識」の下位尺度得点は（ $M: 3.57, SD: .72$ ）となった。「同性外見意識」の下位尺度得点は（ $M: 3.28, SD: .79$ ）であった。そして、「同性連想意識」の下位尺度得点は（ $M: 3.46, SD: .82$ ）となった。下位尺度毎の内的整合性を検討するために各下位尺度の得点のCronbachの α 係数を算出し、確認をおこなったところ「同性内面意識」で $\alpha=.83$ 、「同性外見意識」で $\alpha=.68$ 、「同性連想意識」で $\alpha=.73$ であった。

次に他者意識の異性に関する15項目に対して、主因子法・プロマックス回転をおこなった。その結果、2回目の因子

表 7. 他者意識（対異性）における因子分析結果と因子間相関、信頼性

	因子名		<i>M</i>	<i>SD</i>	α
	異性内面意識	異性連想外見意識			
04_友人の態度や表情を気をつけて見るようにしている	.98	-.26	-.07		
05_友人の考えを絶えず読み取ろうとしている	.86	-.08	.09		
08_友人の言動には絶えず注意を払っている	.80	-.11	-.09		
15_友人の心の動きをいつも分析している	.56	.42	-.33	3.28	.79 .86
09_友人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう	.55	.00	.20		
12_友人の気持ちを理解するように常に心がけている	.55	.06	.12		
01_友人のちょっとした表情の変化でも見逃さない	.42	-.13	.35		
14_友人のことをよく空想する	.02	.80	-.12		
11_友人のことをあれこれと考えていることが多い	.38	.58	-.09		
10_表面的な友人の印象に心を奪われやすい	-.28	.57	.08	2.82	.81 .80
13_友人の体型やスタイルなどに関心がある	-.05	.52	.27		
06_友人の服装や化粧などが気になる	-.07	.48	.41		
07_友人のことがいろいろと心に浮かぶ	.30	.38	.31		
02_友人の外見の変化（髪を切ったなど）に気をとられやすい	-.13	.00	.78	3.15	1.03
03_友人のことにしばしば思いをめぐらす	.34	.22	.40		
因子間相関					
	異性内面意識	異性連想外見意識			
	異性内面意識	—	.70		
	異性連想外見意識	—	—		

分析により 2 因子を抽出した。因子パターンと因子間相関と信頼性を表 7 に示す。

第 1 因子は 7 項目で構成されており、異性の友人に対し内面を意識しているような内容の項目が多かったことから、異性内面意識因子と名付けた。第 2 因子は 6 項目で構成されており、異性を連想させるような項目と異性の友人の外見を意識しているような内容の項目が含まれていることから異性連想外見意識因子と名付けた。第 3 因子は、2 項目だったので分析対象から除外した。因子分析によって抽出された 3 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「異性内面意識」の下位尺度得点は（ $M: 3.28$, $SD: .79$ ）となった。「異性連想外見意識」の下位尺度得点は（ $M: 2.82$, $SD: .81$ ）となった。そして、下位尺度毎の内的整合性を検討するために各下位尺度の得点の Cronbach の α 係数を算出し、確認をおこなったところ「異性内面意識」で $\alpha=.86$ 、「異性連想外見意識」で $\alpha=.80$ であった。

2. 他者意識尺度の高群・低群の群分け

他者意識から抽出された意識では、同性の場合は、同性内面意識、同性外見意識、同性連想意識の 3 つの下位尺度であった。また異性の場合は、異性内面意識、異性連想外見意識の 2 つの下位尺度であった。これらの下位尺度毎の平均値をもとにし、“ $M \pm 0.5 \times SD$ ” で高群と低群に群分けを行った。

3. 同性内面意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差の検討

同性内面意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差を検討するために t 検定をおこなった。

しかし、ファンデーション、アイブロウ、アイライン、アイシャドウ、マスカラ、チークの 6 つの化粧頻度において各場面では有意な差が見られなかった。だが、同性内面意識の低い人より高い人の方が、バイトへ行く時（ $t(63.68) = 2.16$, $p < .05$ ）の場面においてつけまつけをしていた。また、同性内面意識の低い人より高い人の方が、異性の友人と遊ぶ時（ $t(103) = 2.15$, $p < .05$ ）の場面においてリップまたは口紅を塗っていた。

4. 同性外見意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差の検討

同性外見意識の各生活場面と化粧ごとの分類による高群・低群との差を検討するために t 検定をおこなった。

1) ファンデーション

ファンデーションの頻度では各場面において有意な差が見られなかった。

2) アイブロウ

同性外見意識の低い人より高い人の方が、バイトへ行く時（ $t(103) = 2.12$, $p < .05$ ）の場面においてアイブロウを塗っていた。

表9. 同性外見意識の高低によるアイラインの平均値、標準偏差および t 値

女性	低群		高群		t 値
	M	SD	M	SD	
1.好きな人とデート	2.83	1.74	3.73	1.55	2.80 **
2.異性を含めた飲み会	2.74	1.72	3.69	1.45	3.08 **
3.同性のみの飲み会	2.70	1.71	3.62	1.46	2.97 **
4.同性の友人と遊ぶ時	2.68	1.68	3.54	1.45	2.81 **
5.異性の友人と遊ぶ時	2.60	1.69	3.60	1.49	3.20 **
6.一人で家にいる時	1.17	.64	1.23	.81	.43
7.学校へ行く時	2.51	1.64	3.08	1.59	1.80
8.バイトへ行く時	2.51	1.62	3.15	1.55	2.08 *

** $p < .01$ * $p < .05$

表10. 同性外見意識の高低によるアイシャドウの平均値、標準偏差および

女性	低群		高群		t 値
	M	SD	M	SD	
1.好きな人とデート	3.28	1.71	3.94	1.50	2.10 *
2.異性を含めた飲み会	3.23	1.72	3.90	1.46	2.18 *
3.同性のみの飲み会	3.19	1.73	3.90	1.45	2.30 *
4.同性の友人と遊ぶ時	3.21	1.74	3.87	1.47	2.10 *
5.異性の友人と遊ぶ時	3.21	1.74	3.88	1.48	2.15 *
6.一人で家にいる時	1.15	.63	1.37	1.05	1.27
7.学校へ行く時	2.89	1.64	3.29	1.58	1.28
8.バイトへ行く時	2.51	1.61	3.46	1.63	3.01 **

** $p < .01$ * $p < .05$

3) アイライン

表9は、各場面のアイラインの頻度の平均値と標準偏差を比較し示したものである。

同性外見意識の低い人より高い人の方が好きな人とデートする時 ($t(102.03) = 2.80, p < .01$)、異性を含めた飲み会に行く時 ($t(100.67) = 3.08, p < .01$)、同性のみの飲み会に行く時 ($t(101.11) = 2.97, p < .01$)、同性の友人と遊ぶ時 ($t(101.26) = 2.81, p < .01$)、異性の友人と遊ぶ時 ($t(101.77) = 3.20, p < .01$) バイトへ行く時 ($t(103) = 2.08, p < .01$) の5場面においてアイラインを引いていた。

4) アイシャドウ

表10は、各場面のアイシャドウの頻度の平均値と標準偏差を比較し示したものである。

同性外見意識の低い人より高い人の方が、好きな人とデートする時 ($t(101.70) = 2.10, p < .05$)、異性を含めた飲み会に行く時 ($t(100.95) = 2.18, p < .05$)、同性のみの飲み会に行く時 ($t(100.41) = 2.30, p < .05$)、同性の友人と遊ぶ時 ($t(100.84) = 2.10, p < .05$)、異性の友人と遊ぶ時 ($t(100.99) = 2.15, p < .05$)、バイトへ行く時 ($t(102.92) = 3.01, p < .01$) の5場面でアイシャドウを塗っていた。

5) マスカラ

同性外見意識の低い人より高い人の方が、バイトへ行く時 ($t(103) = 2.08, p < .05$) の場面においてマスカラを塗っていた。

6) つけまつげ

つけまつげの頻度では各場面において有意な差が見られなかった。

7) チーク

チークの頻度では各場面において有意な差が見られなかった。

8) リップまたは口紅

同性外見意識の低い人より高い人の方が、好きな人とデートをする時 ($t(100.86) = 2.07, p < .05$)、一人で家にいる時 ($t(70.90) = 2.10, p < .05$) の2場面においてリップまたは口紅を塗っていた。

5. 同性連想意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差の検討

同性連想意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差を検討するために t 検定をおこなった。しかし同性連想意識は、高低群に分けてもどの項目においても有意な差が見られなかった。

6. 異性内面意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差の検討

異性内面意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差を検討するために t 検定をおこなった。しかし、ファンデーション、アイブロウ、アイライン、アイシャドウ、マスカラ、チーク、リップまたは口紅の7つの化粧頻度において各場面では有意な差が見られなかった。だが、つけまつげの頻度と各場面においてはいくつかの有意差が見られた。異性内面意識の低い人より高い人の方が好きな人とデートをする時 ($t(70.24) = 2.36, p < .05$)、異性を含めた飲み会に行く時 ($t(68.65) = 2.40, p < .05$)、同性のみの飲み会に行く時 ($t(70.24) = 2.25, p < .05$)、同性の友人と遊ぶ時 ($t(73.71) = 2.28, p < .05$)、異性の友人と遊ぶ時 ($t(69.65) = 2.31, p < .05$)、学校へ行く時 ($t(66.73) = 2.62, p < .05$)、バイトへ行く時 ($t(60.89) = 2.18, p < .05$) の6場面においてつけまつげをしていた。しかし、有意差はあっても平均値を見るとほとんどの被調査者は実際にしていなかった。

7. 異性連想外見意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差の検討

異性連想外見意識の高群・低群による各生活場面と化粧行動の差を検討するために t 検定をおこなった。しかし、ファンデーション、アイブロウ、アイライン、アイシャドウ、マスカラ、つけまつげの6つの化粧頻度において各場面では有意な差が見られなかった。だが、異性連想外見意識の低い人より高い人の方が、一人で家にいる時 ($t(59.25) = 2.10, p < .05$) の場面においてチークを塗っていた。また、異性連想外見意識の低い人より高い人の方が、好きな人とデートする時 ($t(102.99) = 2.24, p < .05$) の場面においてリップまたは口紅を塗っていた。

この結果、仮説3の他者の外見意識の高い人は低い人より化粧頻度が高くなるについては、部分的に支持されたといえる。

考 察

本研究は自己意識・他者意識と化粧行動の関連を調べることを目的として実証的研究を行った。まず、自己意識と化粧行動の関連についてみていく。仮説1の公的自己意識の高い人は公的自己意識の低い人よりも全体的に化粧度が高くなるについては、アイブロウを除く7つの化粧行動においてどの生活場面でも化粧度は高かった。このことから仮説1はおおよそ支持されたといえる。

また仮説2の公的自己意識の高い人は低い人に比べて目元において化粧度が高くなるについては、状況が好きな人とデートをする時、異性を含めた飲み会に行く時、同性のみの飲み会に行く時、同性の友人と遊ぶ時、異性の友人と遊ぶ時の5つの生活場面で、アイラインの化粧度が高かった。ただしアイシャドウ、つけまつげ、マスカラといった化粧行動は、調査対象者が大学1年生の女子であるためか、アイシャドウ、つけまつげ、マスカラ等は日常的にほとんど使用されていないために、公的自己意識の高低による差は見られなかったと考えられる。このため仮説2は一部支持されたといえる。

次に他者意識と化粧行動の関連をみていく。仮説3の他者意識の外見意識が高い人は低い人よりも化粧度が高くなるについては、一部支持された。同性外見意識が高い人より低い人のほうがアイブロウ、アイライン、アイシャドウ、マスカラ、リップまたは口紅など5つの化粧行動において、より多く使用されていた。

場面別でみると、好きな人とデートするという場面とバイトへ行く時に化粧度が高かった。例えば、デートの時には、ファンデーション、アイライン、アイシャドウ、チーク、リップまたは口紅の使用頻度が高かった。好きな人とデートする時では、特別な相手なので、化粧をし外見的魅力を上げるためではないかと考えられる。バイトの時にはつけまつげ以外、つまりファンデーション、アイブロウ、アイライン、アイシャドウ、マスカラ、チーク、リップまたは口紅の使用頻度が高かった。バイトへ行く時に化粧行動が見られるのは、周囲から意識的にみられ、それが自分の評価に強く関わるような場面では、大学1年生においても多くの化粧行動がとられていることが示された。

引用文献

- Carver,C.S., & Humpries,C. (1981) Havana daydreaming: A study of self-consciousness and the negative reference group among Cuban-Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 545-522.
- Cash,T.F., & Cash,D.W. (1982) Women's use of cosmetics: Psychosocial correlates and consequences. *International Journal of Cosmetic Science*, 4, 1-14.
- 大坊郁夫 (2001) 化粧行動の社会心理学～化粧する人間のこころと行動 高木修 (監修) シリーズ21世紀の社会心理学 9 北大路書房.
- Fenigstein,A.Scheier,M.F., & Buss,A.H. (1975) Public and Private self-consciousness: Assessment and Theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 日々野英子・神谷愛・岡千衣・玉置育子・余語真夫 (1999) 化粧と自己意識 (1) 日本心理学会第63回大会論文集, 727.
- 平松隆円・牛田聡子 (2004) 化粧に関する研究 (第4報) -大学生の化粧意識とそれを規定する個人差要因-, 繊維製品消費科学: 45 (11), 63-70.
- 岩男寿美子・松井豊 (1984) 化粧の心理的効用 (Ⅲ) -化粧後の心理変化 日本社会心理学会第25回大会発表論文集, 128-129.
- Kwon,Y.H. (1922) Body consciousness,self-consciousness, and women's attitudes toward clothing practices. *Social Behavior and Personality*, 20, 295-307.
- Lee,M., & Burns,L.D. (1993) Self-consciousness,and clothing purchase criteria of Korean and United State college women. *Clothing and Textiles Research Journal*, 12, 16-21.
- 松井豊・岩男寿美子・菅原健介 (1985) 化粧の心理的効用 (Ⅴ) -生きがい, 充実感との関係から 日本社会心理学会発表集, 104-105.
- 松井豊・山本真理子・岩男寿美子 (1983) 化粧の心理的効用 マーケティングリサーチ, 21, 30-41.
- Miller,L.C., & Cox,CL. (1982) For appearances' sake: Public self-consciousness and makeup use. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 748-751.
- Scheier,M.F. (1980) Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521.
- 菅原健介 (1984) 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 辻 (1993) 自己意識と他者意識 北大路書房.
- 宇山洸男・鈴木ゆかり・互惠子 (1990) メーキャップの心理的有用性 日本香粧品会誌, 14, 163-168.
- 余語真夫・津田兼六・浜治世・鈴木ゆかり・互惠子 (1990) 女性の精神的健康に与える化粧の効用 健康心理学研究, 3, 28-32.

(本論文は、天野怜美の2013年度卒業論文のデータを再整理し、新たに作成したものである)